令和７年度第１回仙台市協働まちづくり推進委員会　議事録

〇日　　時：令和７年６月25日（水）15：00～17：00
〇場　　所：仙台市役所本庁舎８階　第１委員会室
〇出席委員：高浦康有委員長、岩間友希副委員長、飯田有紀子委員、岡田彩委員、加藤隆委員、神尾真大郎委員、小林幸司委員、庄子康一委員、傅野貞雄委員、春由美委員、藤原希美委員（代理出席）
〇事務局　：市民局局長、市民局次長、市民局次長兼市民活躍推進部長、市民協働推進課長、市民活動推進係長、連携推進係長、他担当職員

〇次第
１　開　会

２　議　事
（１）次期「仙台市協働まちづくり推進プラン」素案について

３　その他

４　閉　会

○会議内容

1　開会

［事務局（市民活動推進係長）］

・ 委員12名中、本日は11名が参加。出席が過半数を超えており、仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例施行規則第４条第２項の規定に基づき、会議は成立する。

・ 以降の進行は高浦委員長にお願いしたい。

［高浦委員長］

・ 議事録署名人については、出席者の中から五十音順で指名したい。今回は加藤委員にお願いしたい。

（加藤委員　了承）

2　議事

（1）次期「仙台市協働まちづくり推進プラン」の策定について

［事務局（市民協働推進課長）］

・ 資料１、資料２－１、資料２－２、資料２－３、資料３、資料４に基づき説明。

［飯田委員］

・ 前回の委員会における、集計結果についての報告で説明があったかもしれないが、2点ほど確認したい。

・ １つ目として、「関心のあるイベントに参加する」というのは、イベントの関心の中身のようなものを確認できる選択肢を設けていたかどうか。

・ もう１点は、関わった活動についての回答だが、やはり拘束時間が短い方が参画しやすい点は大きな要素だと思う。拘束時間の具体的な、要はコミットメントのしやすい関わり方、例えば、活動の時間帯や、活動の所要時間などの回答は把握しているか。

［事務局（市民活動推進課長）］

・ 設問は設けていたが、中身について記載するような選択肢は設けていなかったため、把握はしていない。

・ 活動の拘束時間についても同様で、中身については、今回の調査では聞いてはいなかった。ただ、資料１で紹介した町内会活動は、デジタル化推進のような、時間の拘束が少しでも軽くなる手法がとれるのではないかと思う。

［小林委員］

・　働き盛りの世代においては、なかなか活動に参加できない、参加したくない、という回答が多いことは予想通りだが、参加したいが機会がないという回答も見られる。我々MELONでも、ここ何年かはボランティアを募集しても参加してくれる人がなかなかいない状況。町内会の例を見ても、実際には活動場所はあると思うのだが、若者や参加したい人が求めているものと、（外部の人に）来て欲しいと思っている側が用意している場が、おそらくマッチしてないと考えられる。

・　若者フォーラムの報告資料を見ると、初心者だけで構成されている活動の方が参加しやすいという意見や、質の高いフィードバックが欲しいなど、受け入れ側が想定していないことを求めている現実があると感じる。

・　我々のように参加してもらう側としては、初心者だけのボランティアという発想は考えたこともなかった。できるできないは別として、こういう求めがあり、それに対しどこまで対応できるか分析していかなければ、参加者が増えないと感じる。

［高浦委員長］

・　各NPO団体等も高齢化が進んでいる中で、初めてボランティアに参加する方たちがコミュニティに入りやすいような雰囲気や、仕掛けが必要だと思う。

［春委員］

・　（仙台市社会福祉協議会が運営している）仙台市ボランティアセンターでは、3年くらい前から、ごみ拾いボランティアの募集を企業に呼び掛けている。仙台市では（企業の）支店が多く、支店単独では（社員数の関係で）なかなか参加できないという声があるため、3名1組でチームを作ってもらい、いろいろな企業のチームを集めて一体的に活動を行ってもらうようにした。そこに、昨年から学生が参加するようになった。今年はおそらく今までで一番参加率が高く、90人ほどの参加者となった。

・　このごみ拾いボランティア活動は、朝8時半から10時という短い時間で終わるもの。参加賞として記念品を準備しているが、今年の学生参加者は参加賞も受け取らず、活動に満足して帰っていく方々が多かった。短い時間でできることは、企業さんも学生さんも気軽にでき、（主催者側からの）説明の必要もあまりなく、（初めて参加する人をサポートするために）経験者が必要、というものでもない。

・　中学生から大学生までを対象とする夏のボランティア体験会は、受け入れ施設の希望で「3日間連続」を要件として募集するも、参加率が低かった。コロナ禍の影響から募集期間を短くしたところ、学生さんの参加率は非常に高くなった。

・　アンケートにもあったが、清掃活動や安全パトロールなど、気軽にできて、知識もあまり必要とせず、説明やルールも多くなく参加できる単発ものだと（参加率が）非常にいいと感じたところ。

・ 学生さんの場合、部活やサークルの関係で（ボランティア活動の時間帯を）午前と午後のどちらがいいのか調整することがあるようだ。アルバイトの関係からか、朝のボランティアの方が参加率としては高い印象。
・ イベント系のお祭りなどは、拘束時間が長くても参加率が非常に上がる。お弁当付きになると応募が殺到する傾向もあるようだ。楽しいイベント的なものは、参加率が上がるようだ。
・ プロスポーツチームのボランティアも、参加率が上がっているような感覚がある。

［小林委員］
・ 私が所属するMELONでは、89ERSさんや楽天さん、ベガルタさんの試合でごみ減量の呼びかけを行うボランティアの立ち上げに関わったが、試合当日のスケジュールと関係するため、ある程度の活動時間が必要となった。その結果、参加者は高齢で時間が取れる方やリタイアした方などが中心になる。
・ そういう方がボランティアリーダーのような立場になり仕切り役を担うと、若い参加者は、ベテランの方にいろいろ指示されるなどして抵抗を覚えるような傾向があることは、現場を見て実感している。

［岩間委員］
・ まちづくりへの若者の巻き込みは、次期プランで大きな軸になりそうだが、ここでイメージする若者は、これから新たに増えていくであろう10代を中心とするものなのか、20代から40代も若者として扱うのかを聞きたい。

［事務局（市民活動推進課長）］
・ 若者の年齢層については、私どもの方で特に絞っているわけではなかったが、10年後に社会を担う年代、特に10代や20代前半の層をイメージしていたところ。

［岩間委員］
・ 10代、20代の巻き込みは大事だが、活動への参加率が下がり続けるであろう30代、40代をやる気にさせることも重要だと最近感じている。
・ 数は少ないが、30代、40代、特にお子様をお持ちのお母さんたちで、新たに市民活動団体を立ち上げるという方からのご相談を聞くと、社会の面白さや大変さ、ジレンマなどをよくわかっているため、活動内容が非常に的を得ていると感じる。また、活動の進め方が上手い方も、少なからずいる実感がある。そのような方々が、地域活動の次の世代を担う中核になってくれるやもしれないという期待を感じている。
・ 私が関わっているまちづくりスポット仙台でも、地域の小学生がお店のテナントにかけるグリーンカーテンを植えに来て、お店のテナントの有志さんがお水をあげるとい

う座組を作っている。ボランティアたちが気持ちよく活動に参加するためには、ボランティアが参加しやすい環境を整えてくれる30代、40代が必要だ。
・ 次期プランの軸として若者を巻き込むことや楽しさの実感も大事だとは思うが、環境を整える人という軸も意識してはどうか。

[高浦委員長]
・ 地域や市民ボランティア、活動団体を繋いでいくような、そういう中核的な人材の育成ということも併せて見ていく必要があると改めて思った。
・ お母さんたちの育児サークルから出発し、ご自身たちで、まさに問題解決型のNPOを立ち上げていこうという動きも、様々なまちづくり助成の審査会など出席する中で目にしている。そのような団体が、広く他の団体や企業・事業者と繋がっていくような、そんな協働のあり方に助成していく仕掛けを、より強化していく手もある。

[庄子委員]
・ 私は荒町で見守りプロジェクトをやっているが、力強い人たちや企業が身近にこんなにたくさんいるんだ、と実感している。コーディネートする人を発掘して、その方たちが一緒になってやっていく経験を積むのはとても大事だ。
・ また、夏祭りで高齢者からこどもまで踊れる踊りを作る「ニューダンスプロジェクト」で学生の参加者を募集することになり、「途中参加OK」「来たい時や来れる時だけ参加OK」と、間口を広げて募集することを提案した。そうやって最初は緩く集まってくれた学生が、地域の人たちと話をしていく中で地域の課題や大人の熱量を感じて、「面白いかもしれない！」と気持ちに火が付くような、学生が自然と地域に関わりたくなるような工夫をしている。拘束時間をいかに緩くして、その中で活動への熱意を持ってもらうことの大事さを感じている。

[神尾委員]
・ 私も東北で学生生活を送り今に至るが、自分の周りを見ていても、学生時代はある程度まちづくりなどに参加していた者でも、一度社会に出ると、参加することに壁があると感じている印象を受ける。社会人がまちづくりに関わる際、時間が大きなネックになるため、企業なども、まちの関係者という観点からまちづくりにうまく巻き込んでいくことは必要だと思う。
・ 学生については、負担の少なさも大切だが、より一歩踏み込んだ参加の仕方も大切だと思う。より一歩踏み込んで関わっていくという場面では、コーディネートや情報の辺りがとても大切なポイントになると思っている。
・ INTILAQで行っている大学生向けの6ヶ月間のプログラムは、毎週1時間から2時間ほどコミットが必要で、かつ、隔週で10時から17時まで参加する必要があるが、そ

れでも定員を超過する応募がある。いかにコーディネーターの方が、学生と地域団体の間に入って翻訳をしていくのか。この機能はとっても大切だなと思った。

・ 情報の発信はできるだけ交通整理をし、必要な人に必要な情報を届けられるような、システムがあったらいいと思う。

［事務局（市民活動推進課長）］

・ 市としても、様々な広報媒体に情報を掲載することで多くの方にご覧いただけるよう幅広に広報してきたところではあるが、媒体ごとの役割分担も課題になってくるのではないかと感じている。例えば、本市でも若者に関わってもらいたい事業をいろいろな部署で実施しているが、仙台市のホームページに各部署がバラバラに情報を載せているだけで、肝心の若者に届いていない。どういった方に何を届けたいのかという方針も含めて、広報のあり方をもう一度見直す必要があると感じている。

［岡田委員］

・ プラン素案がエビデンスベースになっていて、とてもよいと思った。

・ 私は研究者として、NPO が社会でどういう存在なのかを考えている。最近の世界的な潮流としては、NPO は課題やお困りごとを解決するためにサービスを提供するだけの存在ではないという考えが主流。人々がただ集まるだけかもしれない、会話をするだけかもしれない、これが大事だと表明するだけかもしれないが、そこに大きな価値がある、という考え方。

・ この考え方がもっと日本で広まれば、NPO やボランティアももっと広まっていくのではないか。事務局より示された「正解よりチャレンジ、成果より学びに」にこの考えが表れており、ぜひ賛同したいと思った。私も全国の自治体のこの分野のプランに明るいわけではないが、仙台市が先進的な形として引っ張っていけるのではないかと思う。

・ 30 代、40 代の現役世代に関連しては、一個人として、市民として行う市民活動という位置付けだけではなく、企業や団体に所属する市民としての市民活動、これを後押ししていくことも、1 つ方向性として考えてみたらどうかと思った。市政モニターアンケートのクロス集計の結果では、自分の持つ知識やスキルを生かした活動支援ができたと考えている人が、30 代、40 代ではそれぞれ 5～6％前後しかいなかったが、逆に（今後伸びていく）ポテンシャルがあると捉えることもできる。現役世代は、仕事があったり、主婦を頑張られていたりと、何かしらの専門性がある。現役世代は（忙しいから市民活動は）無理だよね、とあきらめるのではなく、あなたの専門性を活かしてみませんか、と背中を押すような支援はできないだろうか。「目指す姿」の 1 つ目にある「得意なことで誰かと繋がり」を、企業の社会貢献意欲の高まりと掛け合わせる、という方策はありそうだ。

[飯田委員]

・　私は最近他都市へ転居したのだが、転居先で何か市民活動に取り組みたいと思っても、情報を得るのに非常に苦労しているところ。ひとくちに市民活動に興味関心がある人と言っても活動への参画の程度にはグラデーションがあるだろうが、どんな層にも興味を持ってもらえるきっかけとなるような、相手に届く情報発信が必要だ。

[加藤委員]

・ 地域の中でコーディネートする人は、ある程度組織だって動く必要がある。(コーディネートする人単独では) 地域からいろいろ重いものを背負わされてつぶれてしまい、地域がまた元の状態に戻る、という繰り返しになってしまう。地域ごとにチームができてくると、コーディネートする人ももっと動きやすくなるだろう。
・ 我々（ながまちマチキチ）の事例で大変恐縮だが、去年の春に大学生のボランティアチーム「マチキチユースサポーターズ」を立ち上げた。さらに、ユースサポーターズを卒業した人など大学生より上の年代の組織として「マチキチフレンズ」を立ち上げたところ、20 代から 70 代まで幅広い年代の方 13 名が集まった。
・ これらのチームにイベントの手伝いをお願いする際は、やみくもに声をかけるのではなく、具体的に何人募集するとか、短い時間でも参加できるような枠組みにするといった工夫をすると、参加者も集まりやすい。参加のきっかけを作ったり、組織的に動く仕組みを整えたりすると、各地域でいろいろなものが生まれてくるのではないかと感じた。

[岩間委員]

・ 重点方針の 1、2、3 とあるが、これは割と上位に来るものだから、実際にはこの方針の下に具体的な施策が紐づくことになるのか確認させてもらえると、この方針の大きさや、どのぐらい上位の概念を盛り込むべきかが判断しやすくなる。

[事務局（市民活動推進課長)]

・ 今回この資料の 4 でお示しした重点方針については、現行プランで言えば「重視すべき視点」と同じ位置付けと考えている。
・ 次期プランでの個別事業の位置づけについてはまだまとめきれていないが、重点方針の下に、例えば「広報のあり方」といった施策の方向性がぶら下がり、さらにその下に個別事業がぶら下がってくるイメージである。

[岩間委員]

・ そうなると、例えば情報発信についても、手段そのものより、人が活動に最初に紐づくきっかけの提供といった観点から重点方針を検討することが大事だと思う。

・ 私自身は、好きなことや得意なことをきっかけにしてまちづくり活動に引きずり込まれていったタイプなので重点方針に共感するが、好きなことだけではなく、関心があるといった表現でもよいのではないか。自分の 10 代の頃を振り返っても、自分の好きなことがそこまで言語化できていなかったと思う。(明確に「好き」とまでいかなくとも) ぼんやり関心を抱いているところに誰かと繋がって刺激を受ける (ことによって関心が強まり「好き」になっていく) ことも考えられるので、最初から「好き」に限定しなくてもよいのではないか。

[傅野委員]

・ 町内会に若者がおらず、私は 80 歳を過ぎているから長老だが、町内会の運営ではだいたい、会社を卒業されて町内会のいろいろな行事に参加されている人に声をかけて、役員として運営に携わってもらうという流れになっている。やはり、会社にいたときの職務などで実際 (にリーダーを) やってきた人が (町内会でも) リーダーになることが多いし、我々も、負担をかけすぎてはいけないと思いつつ頼りにしてしまう。ただ、特定の人に役割や負担が偏ると、(皆が役割を分担しようとせず) その人から聞くだけになってしまうので、(誰でも役割を分担できるよう) 平易にしていくというのが我々町内会役員の仕事だと思う。
・ 一方で、我々高齢者世代の持っているものも、何かいいものはあるのではないかと思う。町内会で集まった時には、高齢者の持っているものを皆さんにどう取り入れてもらえるか模索し続ける、という姿勢を維持していきたい。

[高浦委員長]

・ 会社をリタイアされた方たちにとっては、第二の生きがいづくりとしてまちづくりがあり、(会社勤めの経験を生かして) リーダーシップを発揮できる人材が大事だというお話だった。男性も女性も、いろいろと企業で経験を積む中で培ったスキルをいかして、まちづくりにどんどん参画いただけるとよい。
・ 次期プランの内容については、今日皆さんご議論いただいた内容が土台となりながら、次へと展開していくと思うが、重点方針に基づきながら、各取り組み分野を位置付けていく作業に今後なっていくと思う。

2 その他

[高浦委員長]

・ 最後に「3. その他」について、皆さんから何かあるか。

(特になし)

[事務局 (市民活動推進係長)]

・本日の委員会はこれにて終了とさせていただく。

―了―

〈議事録署名人〉

［委員長］ 高浦康有

［署名人］ 加藤隆